

## 大分縣文語シンポジウム

加藤 淳平かとうじゆんぺい

「豊とよの國と古典・文語」廣瀨淡窗を中心として

小矢文則大分縣立圖書館長

佐藤樹一郎大分市長

小生

講演第一部

土屋博「文語の苑」理事

『咸宜園等の私塾の活動を支へた文語』

講演第二部

後藤宗俊別府大學名譽教授・咸宜園教育

研究センター名譽館長

『廣瀨淡窗―その「人」と詩文―』

劍詩吟詠

小天眞道流劍舞道の皆さん

パネルディスカッション

「古典・文語とグローバル時代を生きる

人々」

一 シンポジウム「豊の國と古典・文語」廣瀨淡窗を中心として」の日時・プログラム等、以下の通り。  
日時・場所 平成二十八年十一月二十日（日）午後一〜四時、大分縣立圖書館視聽覺ホール  
プログラム

主催者挨拶

パネリスト

講演者二人

浅野則子別府大學大學院文學研究課長

鳥井裕美子大分大學教育學部教授

コーディネーター

佐藤晃洋大分縣教育廳文化課長

二 最初の主催者挨拶の際、小矢圖書館長および佐藤大分市長の御挨拶の後、小生より、本シンポジウムは、「文語の苑」理事長愛甲次郎の、廣瀨淡窗の公子孫たる廣瀨大分縣知事と同じき經濟産業省出身なるご縁より、開催の運びとなりたれば、本來愛甲理事長が挨拶すべきも、體調不良なるため代理として參上せる由を前置きの上、「文語の苑」成立の経緯と目的、事業の概略、成立當初の指導者たりし岡崎久彦大使を記念する「岡崎久彦文語賞」、現代の國語の問題と文語學習の意義等につき説明す。

三 次いで講演第一部に入り、土屋理事より、『咸宜園等の私塾の活動を支へた文語』と題し、まず文語の雰囲気にとけると、廣瀨淡窗以下の先人が塾の教育の精髓を述べたる言葉を讀み、然る後に文語の特徴・重要性、江戸時代の私塾の位置づけ、森鷗外・夏目漱石、湯川秀樹、福澤諭吉等の受けたる教育の中身、私塾の教材（四書五經・國史略等）と教授法、廣瀨淡窗の咸宜園の教育につき説明せり。之に續く講演第二部として、後藤宗俊咸宜園教育研究センター名譽館長、『廣瀨淡窗—その「人」と詩文—』の表題のもとに、江戸時代後期の田沼時代、幕府の天領にて、西國筋郡代役所の所在地なりし大分縣日田の商家に、生を享けたる廣瀨淡窗が生ひ立ちと人となり、家督と家業を弟久兵衛に譲りたる後、儒者として立ちて私塾咸宜園を創設、弟旭莊と協力しつつ、咸宜園の名聲を全國に廣め、幕末安政年間に歿するに至る一

生、月旦評等に表せらるる咸宜園の教育の特徴等を講義す。

四 須臾の休憩の後、小天眞道流劍舞道を學ぶ生徒・児童等、見事なる劍舞・吟詠を披露し、會衆一同、讚嘆の念を以て視聽せる後、パネリストとて、講演者二人と共に、淺野則子別府大學大學院文學研究科長及び鳥井裕美子大分大學教育學部教授、コーディネーターとて佐藤晃洋大分縣教育廳文化課長、それぞれ登壇し、コーディネーターが司會の下に、パネルディスカッションに進めり。鳥井教授より、廣瀨淡窗と咸宜園の時代の日本をめぐる世界の情勢、淺野科長より、日本の古典文化傳統を現代に活かすむる意義を述べ、また土屋理事は、塾の教育に於ける文語古典の音讀・素讀・熟讀による複眼的思考の會得の意義を指摘し、後藤名譽館長は、生涯日田に住み、下關以遠の地は踏まざりし淡窗の、究極の

ローカルながら地域性を超えて普遍性を自得せるを強調す。

パネルディスカッションの聴衆に、淡窗が一族の廣瀨家出身の廣瀨大分縣知事の御出席を得たれば、最後に同知事の、「現代の變轉窮まりなき世界の動向に對處せんには、表面的事象を追ふにあらず、各人が自らの文化的根源への省察を深化せしめ、その根底に存する世界性を探求こそ、捷徑なれ」の言、パネルディスカッションが自づからなる結論となれり。

五 本シンポジウムは、愛甲理事長の、同じく經濟産業省出身の大分縣廣瀨知事、廣瀨淡窗の一族出身なるに着目し、愛甲理事長より廣瀨知事に、文語に關するシンポジウム開催を打診せるにより具體化したる経緯あり。斯かる御出身なれば、廣瀨知事、文事に深き關心を有せらるるはむべなるのみならず、大

分縣自體、亦、廣瀨淡窗、三浦梅園、帆足萬里、福澤諭吉等の先哲を生み出したるを誇りとする土地柄にして、江戸時代以來の文化傳統、今も脈々と承繼せらる。本シンポジウムのかなり廣き會場を、ほほ埋め盡したる二百名近き聽衆、熱心に講演・討議に聽き入るは、如實にそを示すものならずや。東都に住み、西洋化・國際化せる文化に馴染みつつ、國籍不明の低俗文化の氾濫に眉を顰むること多き我等、大分縣民の文語と文化傳統への關心の、斯く深きに感動す。豊かなる文化傳統と、文事に理解ある知事を頂く大分縣は、全國的に見て例外ならん。されど平素「文語の苑」の文語普及運動に努むるも、滔々たる時勢の勢ひの前に、所詮そは、螻螂の斧に過ぎざらむと無力をかこつ我等、本シンポジウムが盛況に、大いなる鼓舞を得たり。